

# 教員養成課程におけるコミュニケーション能力の育成(Ⅲ) — 小学校教員を目指す学生から見た小学校教員に必要なコミュニケーション能力の諸相 —

## Developing Communication Skills in Teacher Education Programs (Ⅲ) -Aspects of Communication Skills Necessary for Elementary School Teachers from the Perspective of Students Aspiring to Become Elementary School Teachers-

原 田 大 樹・毛 利 泰 剛

Hiroki Harada・Yasutaka Mohri

### 1 はじめに (問題の所在)

本研究では、教員養成課程においてどのようなコミュニケーション能力を身につけさせることが必要なのかを明らかにすることを目的としている。

原田・毛利(2023、2024)では、小学校教員へのアンケート調査を実施し、それまでの経験において、保護者とのコミュニケーションを振り返り、成功体験及び失敗体験から、教員に必要なコミュニケーション能力とはどのようなものが考えられるかを明らかにしている。

それら先行研究で明らかにされたこととして挙げられるのは、①成功体験から見出されたコミュニケーション能力の中心に連携力が配置されていることである。一般的にコミュニケーション能力とは何かを問うた時、話す・聞く力がイメージされやすく、また、それらがどのように機能しているのかが述べられることが多い。「連携力」という新たな枠組みからコミュニケーション能力を措定したことは、管見の限り見られない。そして、失敗体験から見出されたコミュニケーション能力として、②連携できる関係の構築の必要性、心理的成長とともに対人スキルの形成が必要であるということが明らかになっている。

これらは、あくまで現職の教員が、教員のコミュニケーション能力をどのように捉えているかというものを明らかにしたものであり、いわば「結果として」教員のコミュニケーション能力はそのようなものであ

たというものに過ぎない。教員に求められるコミュニケーション能力をどのようなものか措定しようとしたときに、教員以外から見た観点で語られる「教員に必要なコミュニケーション能力」が必要となる。例えば、「児童・生徒」「保護者」「教員を目指す学生」などの、「現職教員以外」から見た教員に必要なコミュニケーション能力である。児童・生徒や保護者から見た教員のコミュニケーション能力に関しては別稿とし、本稿では「教員を目指す学生から見た教員に必要なコミュニケーション能力」を明らかにしていくことを目的とする。

教員を目指す学生は、教員にどのようなコミュニケーション能力が必要であると考えているのであろうか。ここを明らかにするために次の点に留意し調査を行った。

① 教員に必要なコミュニケーション能力を想像で語らせるために、教育実習に出ていない学生を対象とすること

② 教員に必要なコミュニケーション能力とは何かを考える学習機会の前にアンケートを取ること

上記2点を留意点とすることによって、現職の教員が語るコミュニケーション能力との差異を見いだせるのではないかと考えている。

これに関連する代表的な先行研究として、藤原・川俣・福住(2020)が挙げられる。そこでは、「先行研究では、教育実習や教師効力感などとの関連を検討した研究が多く、教職に対する不安に注目した研究知見があまり蓄積されていない(p.42)」と指摘したうえで、

教職に対する不安について調査を自由記述で実施している。調査の結果として10のカテゴリが生成されている。そのうち上位3つの不安は、「児童生徒対応」「授業」「保護者対応」が挙げられており、「児童生徒対応」及び「保護者対応」については、直接的に教員のコミュニケーション能力に対する不安感を持っているということがわかる。また、「授業」に関しても、授業をうまく進められるかという不安もあると想定されるものの、学習者とのコミュニケーションも含んだ授業として捉えれば、これもまたコミュニケーション能力に対する不安感として考えることができる。また、「学生は、これらの授業（大学における授業—引用者注）において理論などの知識を獲得している一方で、学修した内容を実践できるか不安を残している、すなわち、知識の獲得と知識の実践は別問題であるということを指摘（p.43）」している。

このように、教員を目指す学生が不安に思っている「教員としてのコミュニケーション能力」はどのようなものであるのか、以下、調査の結果とともに検討していきたい。

## 2 方 法

調査対象 小学校教員免許取得を目指す学生 46名

調査時期 2024年9月

調査方法・内容 教員と保護者とのコミュニケーションについて、現時点での考えを記入してもらった。具体的な質問項目は以下の二点であった。

質問項目 ①「小学校という場で保護者と教員とのトラブルにはどのようなものが想定されますか。もしくは保護者とのコミュニケーションで不安に感じていることはどのようなものですか」②「①を乗り越えるために、教員としてどのようなコミュニケーション能力が必要だと思いますか」

分析方法 分析の枠組として「修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（M-GTA）」（木下、2003）を参考に分析した。具体的には「①保護者とのコミュニケーションに関するトラブルや不安について、②それに対応する教員に必要なコミュニケーション能力について」を意識しながら、データの関連箇所について着目し、それを一つの具体例とし、

かつ他の類似具体例をも説明できると考えられる「概念」を生成した。「概念」を作る際に、分析ワークシートを作成し、概念名、定義、具体例などを記入した。生成した「概念」と「概念」の関係を個々の「概念」ごとに検討し、関係図にした。複数の「概念」の関係からなる「カテゴリー」を生成し、分析結果をまとめ、その「概念」を簡潔に文章化した。ただし、自由記述による分析のため、理論的サンプリングにおいては限界があった。

倫理的配慮 調査の協力は任意とし、無記名で実施した。また、記入の有無、内容で評価されることはないことを説明したうえで実施した。分析においては個人名や個人が特定される可能性がある記述は対象外とした。

## 3 結 果

分析1：保護者とのコミュニケーションに関するトラブルや不安について

分析の結果、3点のカテゴリー・グループ7点のカテゴリー、12点の概念を生成した（表1）。概念同士の関係とカテゴリー、カテゴリー・グループをまとめ、ストーリーラインを以下に記述し、プロセス図を作成した（図1）。（以下、『』はカテゴリー・グループ、【】はカテゴリー、＜＞は概念を示す。）

・ストーリーライン

保護者とのコミュニケーションに関するトラブルや不安について学生は保護者と『実際に関わることへの不安』を抱えていた。その中の一つとして、＜接し方・伝え方＞、＜連絡ミス＞という【関わり方】においての不安を挙げていた。実際に普段から子どもと関わる中でも＜子どもを介することによる齟齬＞が保護者との関係では生じる可能性があり、日常生活で起こりうる＜子どものトラブル＞も＜連絡ミス＞に繋がることもあり、そういった【子どもを介しての問題】も【保護者の行動】化につながる不安であることがわかった。そして＜接し方・伝え方＞がうまくいかないと教員と保護者では【意見や考え方の違い】が顕在化されてしまい、そのすれ違いによって『保護者に対する不安』と『教員としての能力不足』の不安が想定される

表1 保護者とのコミュニケーションに関するトラブルや不安について

カテゴリー・グループ	カテゴリー	概念	具体例
保護者に対する不安	保護者の人間性	保護者の人間性	「自分が絶対に正しい」と思っている人間との関わり
		不合理な要求・意見	教員に対して必要以上のことを求めてきそう
		指導への意見	授業の方針や児童に対する接し方、対応などへの不満からトラブルになる
教員としての能力不足	教員としての資質・能力	授業準備・指導	授業準備などが忙しく、保護者への十分な対応ができない
		責任感・精神面	学校で起きたことだから責任がある。「責任をとれ」といわれ、どう対応したらいいのだろう
	教員としての行動	発言・言葉	失礼な言葉を発してしまわないかが不安
		過干渉	子どものことが心配すぎるあまり、必要以上に口出ししてしまう
実際に関わる ことへの不安	意見や考え方の違い		私が意図して行う教育が保護者の方々の考える教育と異なってしまったときに、どう対処すべきかがわからず不安
	関わり方	接し方・伝え方	こちら側が伝えたいことがきちんと伝わるかが不安
		連絡ミス	伝達ミスによるトラブル
	子どもを介しての問題	子どもを介することによる祖語	学校でいやな思いをした子どもの親がそのことを学校に言う
		子どものトラブル	子どもたち同士のケンカ、子どもたちの大けが、いじめ問題などでの教員の対応について

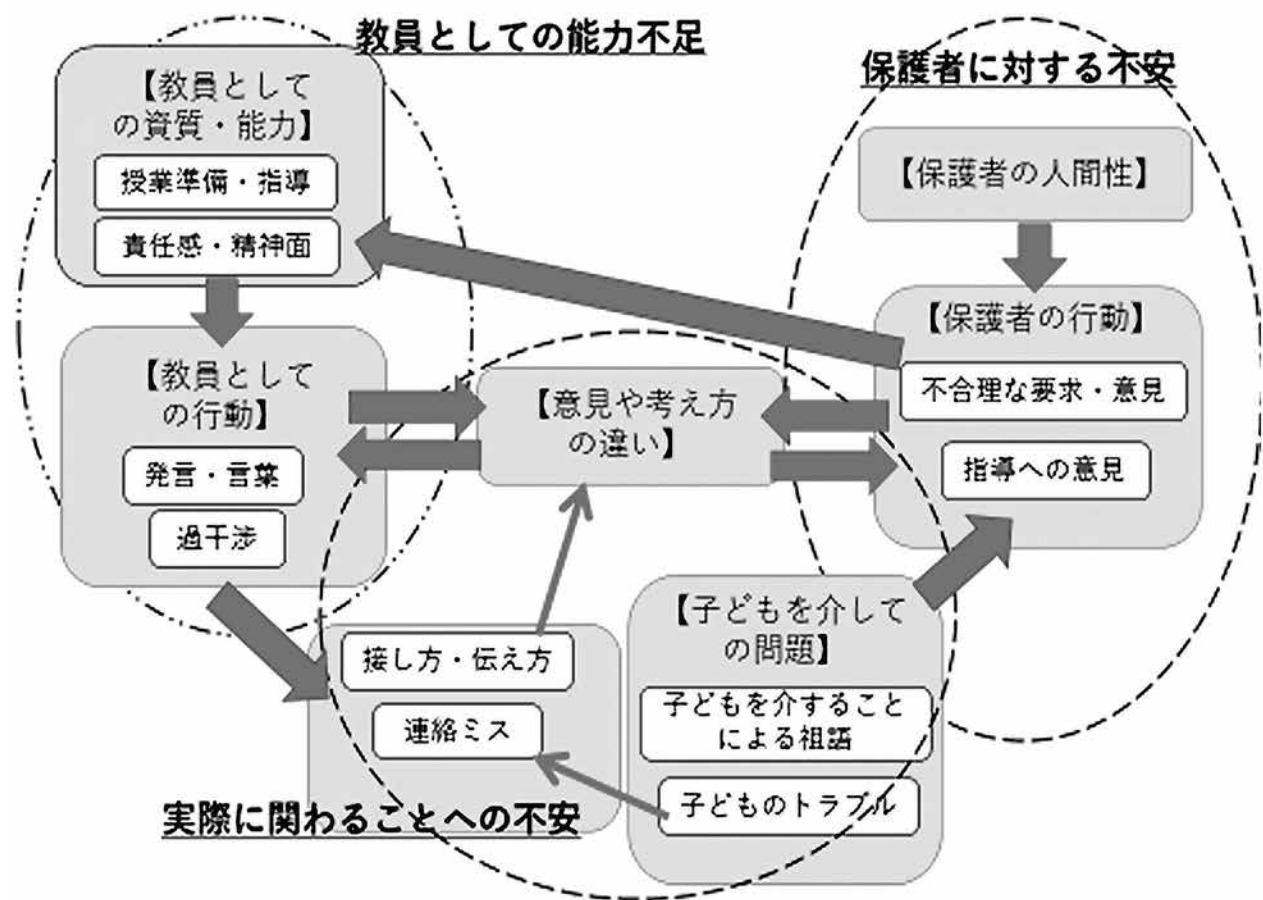


図1 保護者とのトラブルで想定されるものや不安のプロセス

こととなった。『保護者に対する不安』として、まだ実際に関わった経験のない保護者であるが、自分とは違う【保護者の人間性】に対しての不安を持ったり、＜不合理な要求・意見＞や自分の＜指導への意見＞といった【保護者の行動】を不安に思ったりしていた。また【意見や考え方の違い】によって『教員としての能力不足』を感じる事にもつながった。＜不合理な要求・意見＞や自分の＜指導への意見＞といった【保護者の行動】が教員の＜授業準備・指導＞の力不足や＜責任感・精神面＞の弱さという、物理的、心理的な【教員としての資質・能力】の不足を実感させてしまい、それに基づく具体的な＜発言・言葉＞や＜過干渉＞といった【教員としての行動】面への不安が生じてしまっていた。また【教員としての行動】によって【関わり方】への不安や【意見や考え方の違い】といった『実際に関わることへの不安』に繋がっていた。

#### 分析2：教員に必要なコミュニケーション能について

分析の結果、3点のカテゴリー・グループ、7点のカテゴリー、15点の概念を生成した（表2）。概念同士の関係とカテゴリー、カテゴリー・グループをまとめたストーリーラインを以下に記述し、プロセス図を作成した（図2）。（以下、『』はカテゴリー・グループ【】はカテゴリー、＜＞は概念を示す。）

##### ・ストーリーライン

保護者とのトラブルを乗り越えるために教員として必要なコミュニケーション能力として『教員としての能力』と『教員としての行動・姿勢』が挙げられた。『教員としての能力』として＜受容＞や＜共感的理解＞といった【傾聴力】、また＜受容＞できるための＜冷静さ＞や保護者にいつ何を連絡するかという＜連絡の判断＞、実際に保護者に正確に連絡するために＜状況説明＞や＜わかりやすい話し方・言葉遣い＞といった【伝達力】が挙げられた。そして、【傾聴力】や【伝達力】は常に向上していくことが求められており、そのための【成長力】も必要な一つの『教員としての能力』であった。次に『教員としての行動・姿勢』として、【傾聴力】や【伝達力】の向上によって変化していくと考えられる【相手への配慮・態度】が考えられた。保護者＜相手に合わせた支援・交流＞はもちろんのこと、

＜子どもとの関わり＞を実際に行い、伝えることであった。また保護者との関わりにおいて＜教員の連携＞も必要な行動であり、それが＜連絡の判断＞や分担に繋がっているものであった。【相手への配慮・態度】をうまく行う上では、普段から適切なく表情・挨拶＞を心がけ、場合によっては自ら＜反省・謝罪＞を行うなど＜真摯な対応＞を行うことで、保護者との【連携できる関係】を築いていくことが大事ということがわかった。また【相手への配慮・態度】は普段から【行動の責任・根拠】を持って行動することが大事であり、【行動の責任・根拠】を持って行動することや＜反省・謝罪＞を行う事で、自分の能力を伸ばしていこうとする（成長力）に繋がっていくということが想定された。また一方で学生という現時点では保護者とのトラブルや関わりの不安に対しての必要な能力がどのような能力か【わからない】状態にいる学生もいた。

## 4 考 察

### (1)トラブルの想定及び不安に感じていることについて

本稿において調査の対象となったのは大学2年生である。教職を目指し、これから教育実習などを控えている。そのような学生たちは、どのようなトラブルを想定し、どのような不安を感じているのであろうか。

結果を見ると、大きく3つに分類されることがわかる。①保護者に対する不安、②教員としての能力不足、③実際に関わることへの不安である。教員にはコミュニケーション能力が必要であるということを共通認識として持っている学生たちは、コミュニケーション能力に対する不安も感じつつ、自分自身の教員としての資質・能力の未熟さに不安を感じていることが指摘できる。責任感・精神面においてみられるように「責任」が重くのしかかる立場であるという理解に基づくものである。また、授業準備などの多忙さから、保護者対応が十分にできないかもしれない、換言すれば、「余裕がない」であろうと考えていることがわかる。このように、時間的・精神的に不安感をもっている。このような教員の多忙感に関連して、品田他（2020）において、次のように述べられている。

表2 保護者とのトラブルを乗り越えるために教員として必要なコミュニケーション能力

カテゴリー・グループ	カテゴリー	概念	具体例
教員としての 行動・姿勢	状況に応じた姿勢	行動の責任・根拠	発する言葉に責任を持ち、話の根幹が何かを教員自身が理解する
		表情・挨拶	話しやすい雰囲気を作るために表情や相づちを気を付け
		真摯な対応	真剣に子どもたちに向き合う姿勢と日頃の態度
	関係性の構築	反省・謝罪	間違っていたなら謝罪する
		教員の連携	教員同士で児童を理解（共有）して、自分一人の見方考え方ではなく、多くの人の意見（考え方）について話す
		相手に合わせた支援・交流	一人一人の家庭にあった支援や関わりをする
教員としての 能力		子どもとの関わり	一人一人の児童をよく見る
		成長力	失敗を自分のものにし成長する力
	伝達能力	分かりやすい話し方・言葉遣い	誠意が伝わる言葉遣い
		冷静さ	イライラしすぎず、常に冷静に判断する。
		連絡の判断	子どもの様子に応じて保護者へ連絡するべきかどうかを判断する
	傾聴力	状況説明	クラスの状況を把握し、適切な時に伝えられるようにする
		受容	子どもだけでなく保護者にも寄り添うこと
		共感的理解	相手の話や気持ちをしっかり受け入れ理解しようとする こと
	わからない	わからない	

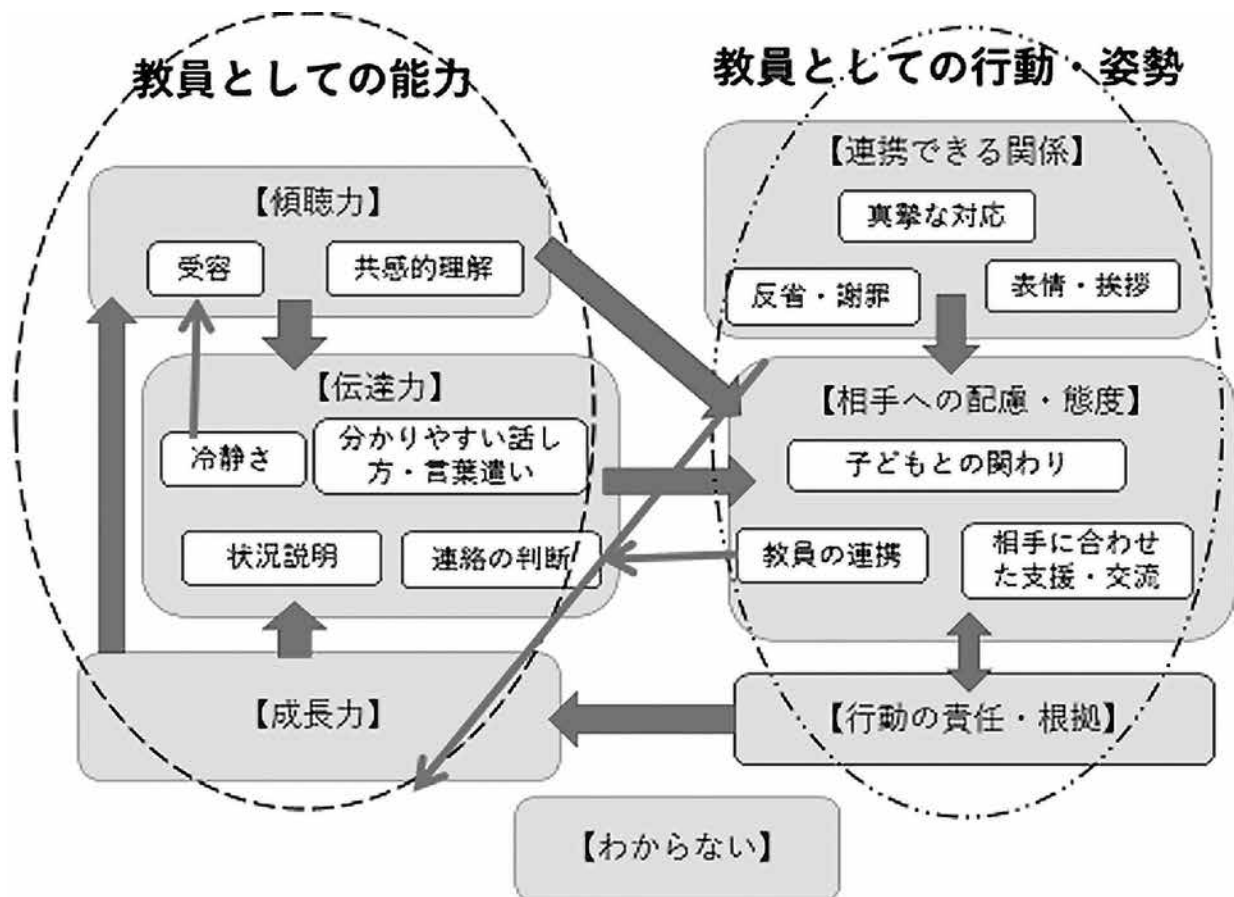


図2 トラブルを乗り越えるために必要なコミュニケーション能力のプロセス

全体の7割超の教員が持ち帰り仕事または休日出勤をしていた。このような勤務状況を反映して、主観的な多忙感・危機感を測定する7項目のすべてにおいて、「強く感じる」「やや感じる」を合わせた割合は半数を超えていた。(中略)事務・報告書の作成、学期末時期の業務の集中、児童指導要録の作成、他校や団体と協力が必要な学校行事、保護者・PTA対応はいずれも7割以上が「強く負担を感じる」または「やや負担を感じる」と回答していた。(p.5)

教育現場に勤めている教員は、多忙感・危機感をもっており、また様々な業務とともに保護者・PTA対応も7割以上が負担感をもっているという指摘がある。この傾向は、教職を目指す学生も同様の想定ができていえる。昨今のSNSやメディアにおいて教員の多忙感に関連する記事等を目にしたことが、そのような認識形成につながっていると考えることができる。

一方で、保護者への不安も見られる。例えば「必要以上のことを求めてきそう」といったような想定は、教職を学ぶ中で形成されつつある教師としての「業務の枠組み」と実際に目にする記事などによって形成された保護者からの要求との差異によって見出されたものであろう。そして、保護者の多様性というものの視野に入れつつ、不安も抱えている。この不安は、保護者と教員といった立場の違いから生み出される現象であるとも考えられるが、教職を目指す学生は、保護者とコミュニケーションを取っていききたい、子どものために協働したいという願望が背景にはあると言えらるう。そうしたときに、協同を阻む要因として挙げられたものであると推察できる。

このように、教職を目指す学生が想定するトラブルや抱える不安の根底は、保護者と協働したい、コミュニケーションをうまくとっていききたいという、いわば前向きな思考から形成されるものであると捉えることができる。

## (2)教員として必要なコミュニケーション能力の指定について

(1)のようなトラブルを想定し、不安感をもっている学生は、それらを乗り越えるためにどのようなコ

ミュニケーション能力が必要であると考えているのであろうか。

大きく、「教員としての行動・姿勢」と「教員としての能力」と分類できた。それらから見出されるコミュニケーション能力は多岐にわたるが、「話の根幹」「表情・相づち」「真摯」「謝罪」「一人一人にあった」などが含まれている。これらは、コミュニケーションの際に、「何を」「どのように」伝えるか／聴くかといったことにつながる。いわば、コミュニケーションの内容と方法である。また、「何を」に関わるものとして、児童との関わりや「連携」なども含まれてくる。その時に、伝えるべき情報をどのように切り取るのか、もしくは精査するのかという点が、求められるコミュニケーション能力から見えてくる「身につけられるべき力」ともいえる。

さらに、「教員としての能力」を見ると、「成長力」が含まれており、教員としての様々な経験を力に変えていこうとする前向きな発想があると言える。

## (3)総合考察

以上、二つのアンケート結果からそれぞれの考察を試みた。それらから見出されるものとして、教職を目指す学生は、大きな不安を抱えながらも、実に前向きに捉えていることがわかる。保護者対応に対する不安は大きいものであると推察されるが、そこには、「協同」していききたいという願望が見られる。

こういった保護者との関係性について、毛利・原田(2024)では、次のように述べられている。

【親の立場の理解】においても、家庭状況や親の性格は多種多様であり、理解しようとすることはできても、完全に理解することは難しく、その保護者に常に寄り添いながら対応していく必要がある。そういった意味では経験を積んでいるからこそ、必要と感じる項目である考えられる。(p.84)

これは、現職の教員に対するアンケートから考察されたものではあるが、多種多様な保護者への寄り添いは、一定の経験を必要とするという指摘である。また、保護者とのコミュニケーション上のトラブルを誘発し

てしまう原因については次のように述べている。

保護者が教員に対してこのような「クレーム」を突き付けてくるのかについては様々な要因が考えられるが、一つの要因として、先に挙げた文部科学省（2011）が示す「必要とされる教員の資質能力の充足度」におけるコミュニケーション能力の保護者と教員の認識の違いが要因の一つである（p.84）

こうした点を踏まえるならば、保護者とのトラブルは、保護者と教員の認識の違いであったり、それに伴う、それぞれの教育というものへの考え方や「枠組み」自体が保護者と教員とで異なる点があるともいえる。また、保護者とのトラブルを回避するためには、一定の経験を必要としているがために、教職を目指す学生は、その経験に乏しく、社会に存在するそれに関連した「情報」によって大きな不安を抱えていくということにつながっている。さらに言えば、教育実習等で教育現場に出ることはあっても、保護者対応などの場面に遭遇することはあったとしても、実習生であるという立場上、実際に保護者対応を行うことは難しく、教育現場に出るまでに「保護者対応」という経験を積むことはできないことが多い。したがって、教員養成課程においては、保護者対応について学ぶことはあっても、経験そのものを積むことは不可能であるという状況そのものも、教職を目指す学生にとっての不安の一要因につながっていると考えられるのである。

しかし、保護者と「協同していきたい」という思いは存在し、それは、一つに子どもの成長・発達のためにという想いのもと形成されている。このような点を踏まえ、教員養成課程において保護者対応を（模範的にでも）経験できる場の設定ができれば、不安感の解消の一助となるのではないだろうか。

## 5 おわりに

本稿では、教職を目指す学生が教員に必要なコミュニケーション能力をどのように措定しているかを明らかにしてきた。しかし、これは、あくまで「学生が仕入れた情報」を基に保護者像を想定したうえで見出したものである。

今後、学生が考えるコミュニケーション能力と現職教員が考えるコミュニケーション能力との共通点、相違点を考えたうえで、現実的な教員養成課程におけるコミュニケーション能力の育成の在り方を考えねばならない。

## 参考文献

- 品田瑞穂 萬羽郁子 小宮山利恵子 佐々木裕子 松田恵示 中野幸夫 田嶋大樹 山内朋也 酒井春名 金子嘉宏（2020）「小学校教員の職務の負担感と多忙感・危機感の関連-教員の視点に立った働き方改革の実現に向けて-」『学校教育学研究論集』41号 ,pp.1-13
- 原田大樹・毛利泰剛（2023）「教員養成課程におけるコミュニケーション能力の育成（Ⅰ）—小学校教員の成功体験を中心に—」『福岡女学院大学紀要 人間関係学部編』24号 ,pp.51-57
- 藤原和政・川俣理恵・福住紀明（2020）「教職課程を受講する大学生の教職に対する不安の探索的検討」『教育カウンセリング研究』vol.10, No.1, pp.41-45
- 木下康仁「グラウンテッド・セオリー・アプローチの実践 質的研究の誘い」 弘文堂, 2003
- 毛利泰剛・原田大樹（2024）「教員養成課程におけるコミュニケーション能力の育成（Ⅱ）—小学校教員の失敗体験を中心に—」『福岡女学院大学紀要 人間関係学部編』25号 ,pp.79-85
- 【付記】本研究は、科研費 24K05926 の成果の一部である。